

待賢小学校瘖啞教場と京都盲啞院に関する資料分析

京都府立盲学校と京都市学校歴史資料館所蔵の明治期資料から

ANALYSIS OF HISTORICAL DATA OF BLIND AND DUMB CLASSROOM IN THE TAIKEN
ELEMENTARY SCHOOL AND THE KYOTO BLIND AND DUMB SCHOOLFrom the Kyoto prefectural school for the visually impaired and from historical manuscripts
from the Meiji era in the Kyoto municipal museum

木下 知威*

Tomotake KINOSHITA

Archives of the Kyoto blind and dumb school were analysed on following 3 aspects.

1. It is the Meiji era period and there are 325 documents in material room in Kyoto Prefectural School for the Visually Impaired. The document that specializes only in construction is seven.
2. The Okoshiezu was made in 1886 when the material of the Taiken elementary school was compared with the Okoshiezu. It is thought that the in-a kyojo (blind and dumb classroom) in the Taiken elementary school used a part of two-storied classroom.
3. Historical data concerning Architecture of the blind and deaf mute education in Kyoto of the Meiji era is 13 documents, 6 hanging scrolls and 1 photo.

Keywords : Blind, Deaf, Dumb, School Building, Meiji, Education, Historical materials

盲, 聾, 啞, 学校建築, 明治, 教育, 史料

1、研究の背景と目的

現在、日本には聾学校、盲学校が全国にあるが、この源流であるのが明治十一年に創建された日本最初の盲啞院「京都盲啞院^{注1)}」である。その後身となった京都府立盲学校資料室には明治から現在まで古文書、写真、教材、記念品が約三千点収蔵されている。これは、昭和十年代に京都府庁保存庫から移された「京都府庁文書」の簿冊類が含まれており、明治から戦後に至るまでの京都府盲啞院記録の主体を成している。とくに文書は京都府立盲学校創立九十周年記念事業(昭和四十三年)の一環として着手された資料整備作業の中で「京盲文書」と命名されている。これらの資料は全国的にみても、二番目に創立された、明治十三年の楽善会訓盲院(現在:筑波大学附属視覚特別支援学校、筑波大学附属聴覚特別支援学校)において、聾学校側が第二次世界大戦による混乱で殆どの史料を失っているとされることを考えると、京都府立盲学校資料(以下、京盲文書)は戦前の視覚・聴覚障害教育史を鑑みる上でも唯一無二の史料として位置づけられる。筆者はこれらの資料から、京都盲啞院の建築について分析・考察を行い、現在の京都国立博物館にあった恭明宮、京都御苑内の南西部に位置する親王家の閑院宮が居住する閑院宮邸から移築され、明治三十一年に大掛かりな部分改築があったことを明らかにしているが^{注2)}、京都盲啞院が成立する以前に待賢小学校瘖啞教場がどのような建築であったかについて課題が残された。また、京都府立盲学校資料室の明治期資料の全体に関する考証と建築・空間

構成に関する資料の位置づけを行うことができなかった。そこで、京都市学校歴史博物館の資料と明治期の京盲文書を分析することで明らかにしたい。

2、既往研究

明治八年頃に京都盲啞院の前身である、瘖啞教場が設けられた待賢小学校については学校史が公刊されている^{注3)}。また、京都における番組小学校に関しては、辻と秋山^{注4)}、大場^{注5)}、森^{注6)}による教育史・建築史的研究があるが、待賢小学校についてははされていない。

次に、京都府立盲学校資料室所蔵資料を整理したものとして、後身校となった京都府立盲学校、京都府立聾学校の編纂による校史がある^{注7)}。これは学校関係者による編纂であり、年表、教育課程、卒業生数、在籍生数など学校のデータが示されている。また、資料を活用した書籍も出版されている^{注8)}。これらは日本各地の盲、聾教育を概観したものから写真を再編集したもの、盲啞院創設者の古河太四郎の人物伝である。また、『京都府盲聾教育百年史』(以下、『百年史』)『わが国特殊教育の成立』においては本格的に京都府立盲学校所蔵資料が総合的に活用されたものであり、教育的手法や経営の実態について明らかにされた。

3、研究の方法

まず、明治期の京盲文書について分析と分類を行い、書誌学的な

* 横浜国立大学大学院工学府社会空間システム学建築コース
工修

Graduate Student, Faculty of Engineering, Yokohama National Univ., M. Eng.

考察を加えて京盲文書の性格について明らかにしたい。次に、既報で示した各時代の盲啞教育の建築・空間を明らかにするべく使用した京盲文書について紹介した。これは年代・作図者・状況について記述された資料、『百年史』、京都府庁文書^{注9)}、新聞記事類と照応させつつ考証を行った。待賢小学校啞啞教場については、京都市学校歴史博物館が所蔵する起こし絵図と学校史を照応させて分析した。

4、京盲文書の書誌学的分析

4-1 明治期の京盲文書の数量について

明治期の京盲文書について整理を行ったところ、盲啞院創設期である明治時代に書かれていると思われる盲啞院資料は325点である(表1-1、1-2、1-3)^{注10)}。また、簿冊以外にも、建築平面図と教室・野外の絵図、職員勤続年月表などの掛図が34点である。

4-2 外形について

これらの文書は往復書簡、手紙、葉書など紙媒体の記録資料が様々な綴じ方をされた簿冊で構成されている(写真1)。大きさは様々であるが、ほぼA4縦からB5縦までであり、罫紙を二つ折に袋綴、大和綴にする形式を採用している。角ぎれはいずれの文書にも施されていない。また、一部は文書の下辺小口に題目を記入する、小口書がされていた。蔵書印は、「盲啞院蔵」と捺印されているものが散見された。また、番号、品目、受入、科別が印刷された紙に「昭和廿四年 七月貳拾日」と捺印された文書もみられた。表紙については、美濃紙と板紙で、いずれの文書にも表紙に外題がかかっていた。そこで、各文書の外題と内容を確認すると年代的には矛盾しないが、関連する事柄が年を跨いでいる場合は次年の文書があわせて綴じられているものもあった。また、複数年にわたった外題がつけられているものもあり、内容もまた複数年にわたってまとめられているものもみられた。そして、いずれの文書も書帙や書函など付属物はみられず、装飾もされていない。

4-3 京盲文書の本文について

本文料紙には、薄い青色の罫線と「京都府」「京都府盲啞院」「盲啞院」など京都盲啞院や行政機関、商店名などが罫紙中央下部に印刷された紙を使用している。また、書簡を綴じているものや葉書を糊で貼りつけているものもみられた。筆記形式は墨、朱墨と鉛筆で行われ、書類によっては記入者の捺印もみられた。損傷の状況については、虫喰い、手擦れがみられ、修補を行っているものとしていないものもあった。また、綴じの関係で、文書そのものを開披できない部分も散見された。

4-4 京盲文書の全体の傾向に関して

それぞれの京盲文書につけられている題にしたがって、各年に関連する文書の数を集計した(図1)。これをみると、京盲文書の年代については、明治九年の資料「明治九年 恭明宮一件 京都府」がもっとも古いものである。関連する簿冊がもっとも少ない年代が1冊(明治九、十年)であり、もっとも多いのは16冊(明治十三年)であり、これを平均すると一年あたり11.08冊であることがいえる。創立以後は文書の数が増加しつづけ、減少することはあっても、7冊を下回ることはなかった。

次に、京盲文書の内容についても全体的に総覧したうえで分類を行ったところ、図2のようになった。図2にしたがって数が多いものから解説する。最も多いのは「政治・運営」(78点)で、「諸伺」「諸



写真1 京盲文書の一例

課往復文書」と外題につけられた資料である。基本的に盲啞院職員と京都府、京都市の職員が盲啞院運営・教育方針、教材、修繕に関して往復した文書が収められているものである。また、地元の商店等と交わした注文書もある。

次いで多いのは「教育」と「生徒」(71点)である。「教育」は「試験書類」「学年末書類」「教授要旨」などが該当し、試験時の問題用紙、解答用紙、教授方法等を収めた簿冊である。「生徒」は「試験成績品」「名簿」「成績表」など入学記録、盲・啞の原因調査、成績表、成果物、動向調査など生徒個人の記録である。

その次が「財政・寄付等」(67点)で、「経費予算」「寄附金一件」「収入金簿」などが該当し、年度の財政状況報告、寄付金の報告書である。この3分類は盲啞院内部の財政事情を示す重要な資料である。

「人事」(64点)は「賞与原書」「履歴書」「奉命簿」など盲啞院職員の履歴書や賞与、任命、退職に関する書類である。外題だけで判断すれば、数は少ないが、実際は、政治・運営関連の「諸伺」「諸課往復文書」のなかで勤務者の雇用、退職、解雇に関する文書が含まれているために、多くの数を示すこととなった。逆にいえば、盲啞院職員の雇用形態、雇用人員は明治を通して固定されているわけではなかったともいえる。

「その他」(45点)は「博覧会出品書」「式典記」「巡視一件」など成果物を博覧会へ出品する際の関連文書、外部行事への参加に関する書類、皇族による授業の高覧、官吏による見学など、盲啞院との渉外に関する文書が大部分である。

「日誌」(44点)は「日誌」「記録簿」であり、一年ごとに盲啞院での出来事を記録している。しかし、日付が飛んでいるものもあり、情報量は一定していない。

「学事年報」(23点)は「学事年報」とつけられた文書であり、盲啞院の生徒数、教員数、盲啞院の略歴を記録したものであり、学校の紀要と言ってよいものである。

「規則」(16点)は「諸規則」「課程表」など盲啞院に関する入学、生活、教程などを明記した校則やその下書きの文書である。

「建築修繕」(7点)は「増建一件」「修繕一件」「新築一件」など盲啞院の建築に関する敷地図、測量図、建築案などに関する資料であり、表1-1、1-2、1-3で★の印があるものを指している。

「設立」(3点)は「沿革」「設立」など盲啞院の設立に関する意義について書かれた簿冊である。また、諸伺に図面が封入されている

	明治9年 合計 1冊
★1	明治九年 恭明宮一件 京都府
	明治10年 合計 1冊
8	明治十年十二月以降 盲哑学校設立一件
	明治11年 合計 14冊
2	自明治拾壹年四月至明治拾八年老月奉命簿 盲哑院
3	明治十一年 本院設立建議一件 盲哑院
★4	明治十一年 諸同 盲哑院
5	明治十一年 本院二関心盲哑教育書類
6	自明治十一年到明治十四年 諸規則章程綴込 盲哑院
7	自明治十一年五月至明治十四年十二月 盲哑院一覽
9	自明治十一年到十三年 日記 盲哑院
10	明治十一年 諸課掛往復簿 盲哑院
★11	明治十一年 建築及修繕一件
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
13	明治十一年 本院編製諸規則 盲哑院
14	明治十一年 学務課往復簿 盲哑院
★15	自明治十一年到明治十四年 検査用書類綴込 盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治12年 合計 11冊
★16	明治十二年 中学内英学寄宿舎並盲哑院新築一件
17	明治十二年 学務課往復簿 盲哑院
18	明治十二年 諸課掛注文出留 盲哑院
19	明治十二年 諸同 盲哑院
19A	明治十二年三月 寄附領収簿第壹号 京都府盲哑院
19B	明治十二年十一月ヨリ 盲哑院賞与原書 調査掛
6	自明治十一年到明治十四年 諸規則章程綴込 盲哑院
7	自明治十一年五月至明治十四年十二月 盲哑院一覽
9	自明治十一年到十三年 日記 盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	明治13年 合計 16冊
20	明治十三年五月 寄附金領収簿第貳号 京都府盲哑院
21	明治十三年 諸同 盲哑院
22	明治十二年十三年中 盲哑院一件
23	自明治十三年五月 本院諸規則一件 盲哑院
24	明治十三年 文部卿巡視一件 盲哑院
25	明治十三年 諸課掛役所往復書留 盲哑院
26	明治十三年五月 盲人職工生名簿
27	明治十三年 学務課往復簿 盲哑院
★28	明治十三年 盲哑院教場建築地買上件
28A	明治十三年 教育手順書 盲哑院
28B	明治十三年 著書草稿 盲哑院
6	自明治十一年到明治十四年 諸規則章程綴込 盲哑院
7	自明治十一年五月至明治十四年十二月 盲哑院一覽
9	自明治十一年到十三年 日記 盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治14年 合計 11冊
29	明治十四年ヨリ 達書 京都府盲哑院
30	明治十四年 盲哑院学事年報
31	明治十四年 学務課往復簿 盲哑院
32	明治十四年 諸同 盲哑院
33	明治十四年 諸課掛役所往復簿 盲哑院
34	明治十四年ヨリ至明治十四年十二月 日記 盲哑院
34A	明治十四年十二月 学事年報
6	自明治十一年到明治十四年 諸規則章程綴込 盲哑院
7	自明治十一年五月至明治十四年十二月 盲哑院一覽
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治15年 合計 8冊
35	明治十五年中 学務課往復書 盲哑院
36	明治十五年中 同上申書 盲哑院
37	明治十五年 盲哑教授参考書
38	自明治十五年一月 日記 盲哑院
38A	明治十五年中 各廳並諸課掛往復書 盲哑院
38B	明治十五年 盲哑院授業要旨並課程表 盲哑院諸規則教科書調べ表
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書

	明治16年 合計 8冊
39	自明治十六年一月至同年十二月 日記 盲哑院
40	明治十六年中 同上申書 盲哑院
41	明治十六年中 学務課往復書 盲哑院
42	明治十六年一月調 学事年報
43	明治十六年中 各庁並諸課掛往復書 盲哑院
44	自明治十六年四月 検査一件書 盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治17年 合計 10冊
45	自明治十七年一月 各庁並諸係往復綴込 盲哑院
46	明治十七年 学務課往復書綴 盲哑院
47	明治十七年一月 学務課往復書 盲哑院
48	自明治十七年一月至同年十二月 日記 盲哑院
49	明治十七年ヨリ 巡視一件書 盲哑院
50	明治十七年一月調 学事年報
51	自明治十七年一月 同上申綴込 盲哑院
52	明治十七年五月於 岡山県学事奨励会之部出品 京都府盲哑院出品説明書
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治18年 合計 8冊
54	自明治十八年一月 学務課往復書 盲哑院
55	案 明治十八年一月調 学事年報 京都府盲哑院
56	自明治十八年一月一日至同年十二月 日記 盲哑院
57	自明治十八年一月 同上申綴込 盲哑院
67	明治十八年三月 検査一件書 盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治19年 合計 13冊
58	明治十九年一月 各庁並諸課掛往復綴込 盲哑院
59	明治十九年 第一号盲哑院教則考案書
60	自明治十九年一月至同年十二月 日記 盲哑院
61	自明治十九年一月 同上申綴込 盲哑院
62	明治十九年一月調 案 学事年報 京都府盲哑院
63	明治十九年 京都府盲哑院専修科教授要旨
64	明治十九年 第三号盲哑生普通科教授要旨 盲生普通科課程同表 嚙生普通科課程同表
65	明治十九年 第四号京都府盲哑院 盲生専修科教授要旨並課程同表 嚙生専修科教授要旨並課程同表
66	明治十九年 第二号京都府盲哑院諸規則
67A	明治十九年学務課達達綴 京都府盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治20年 合計 15冊
68	明治二十年一月起同上 日注簿 京都府盲哑院
69	明治廿年十一月調 沿革略 京都府盲哑院
70	明治二十年三月 嚙生試験問題
71	明治二十年三月 盲生試験問題
72	明治二十年中 諸官署付諸所往復書 京都府盲哑院
73	明治廿年中 同上申書 京都府盲哑院
74	明治二十年 盲哑院一件 学務課
75	明治廿年中 学務課往復書 京都府盲哑院
76	明治二十年 盲哑教育器械説明書、控 北亞ルイシヤナ州 博覽会出品説明書 大日本京都府盲哑院
77	二十年分明治二十年 学事年報 京都府盲哑院
78	十九年分明治二十年一月調学事年報 京都府盲哑院
78A	明治二十年 京都府盲哑院記
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書
	明治21年 合計 8冊
79	明治廿一年 同上申書 京都府盲哑院
80	明治廿一年四月 試験書類 京都府盲哑院
81	明治廿一年 学事年報 京都府盲哑院
82	明治廿一年 諸往復書 京都府盲哑院
83	明治廿一年六月調 京都府立盲哑院概況
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
	自明治十一年至同二十一年 在学証書

表1-1 京都府立盲学校資料室所蔵資料
京盲文書全リスト
★印は建築に特化された資料を意味する。

数字は表紙に貼られたシールの番号である注10。

	明治22年 合計 13冊
84	明治二十二年中 盲哑院一件 学務課
85	明治二十二年 日注簿 京都府盲哑院
86	明治二十二年 学事年報 京都市盲哑院
87	明治二十二年四月改正 京都府立盲哑院規則
88	自明治廿二年五月至廿二年十一月 諸達書綴 盲哑院
89	明治廿二年 同上申書 京都府盲哑院
90	明治二十二年三月 試験書類 京都府盲哑院
91	自明治二十二年至同二十八年 在学証書 京都市盲哑院
★92	明治二十二年 所有財産調書綴 盲哑院
93	明治二十貳年度自十二月至三月 盲哑院支出予算
94	明治二十二年 往復調書 京都府盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
	明治23年 合計 12冊
95	明治二十三年十一月廿二日 音曲会一件書綴 京都市盲哑院
96	明治二十三年 学事年報 京都市盲哑院
97	明治二十三年三月 試験一件書類
98	明治二十三年度 経費予算差引簿 京都市盲哑院
99	明治廿三年 同上申書 京都市盲哑院
100	明治廿三年度 収支予算書 京都市盲哑院
102	明治二十三年 諸往復書 京都市盲哑院
103	明治二十三年二月二十八日 寄付金収入簿 京都市盲哑院
104	明治二十三年四月八日 皇后宮陛下行啓記録 京都市盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
101	明治二十三年ヨリ廿六年ニ至ル 日注簿 京都市盲哑院
	明治24年 合計 15冊
105	明治二十四年 寄附金一件書 京都市盲哑院
106	明治貳拾四年 学事年報 京都市盲哑院
107	明治二十四年 同上申替 京都市盲哑院
108	明治二十四年 寄付金申込書上京区ノ分
109	明治二十四年 露国皇太子殿下へ贈品卓掛一件書類 京都市盲哑院
110	明治二十四年 諸往復書 京都市盲哑院
111	明治二十四年三月 試験書類綴込 京都市盲哑院
112	明治二十四年 経費予算差引簿 京都市盲哑院
113	明治二十四年 寄付金申込書 各郡ノ分
113A	明治二十四年 寄付金申込書 無名管外諸所ノ分
113B	明治二十四年 寄付金簿 下京ノ分 京都市盲哑院
113C	明治二十四年ヨリ 寄付金一件雜記 京都市盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
101	明治二十三年ヨリ廿六年ニ至ル 日注簿 京都市盲哑院
	明治25年 合計 13冊
114	明治二十五年ヨリ 盲哑院資金調書
115	明治二十五年以後 臨時件綴込 京都市盲哑院
116	明治二十五年 学事年報 京都市盲哑院
117	明治二十五年三月 嚙尋常科定期試験成績三冊之内解書(単語・作文・書取・筆談)
118	明治二十五年 諸往復書綴込 京都市盲哑院
119	明治二十五年度 収支予算書 京都府盲哑院
120	明治二十五年度 経費予算差引簿 京都市盲哑院
121	明治二十五年 同上申書 京都市盲哑院
122	明治二十五年三月 試験一件書類 盲哑院
123	明治廿五年九月 米国シカゴ万国博覽会出品書類綴 京都市盲哑院
12	自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲哑院
53	自明治十八年四月至同四十一年三月奉名簿第貳号盲哑院
101	明治二十三年ヨリ廿六年ニ至ル 日注簿 京都市盲哑院

表1-2
京都府立盲学校資料室
所蔵資料 京盲文書全リスト

★印は建築に特化された資料を意味する。

数字は表紙に貼られたシールの番号である^{注10)}。

明治26年 合計 11冊
124 明治二十六年三月 試験書類 式綴ノ内 盲唯院
125 明治二十六年 学事年報 京都市盲唯院
126 明治二十六年 同上申書 京都市盲唯院
127 明治二十六年度 経費予算差引簿 京都市盲唯院
★128 明治二十六年二月 寄宿舍増建一件 盲唯院
129 明治二十六年度 収支予算 京都市盲唯院
130 明治二十六年 諸往復書 京都市盲唯院
130A 明治二十六年三月 試験書類 盲唯院
12 自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
101 明治二十三年ヨリ廿六年ニ至ル 日注簿 京都市盲唯院

明治27年 合計 15冊
131 明治二十七年 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
132 明治二十七年 嚙生科尋常定期試験成績品 七綴之内 一年生二年生三年生 算術
133 明治二十七年三月 嚙生尋常科定期試験成績品 七綴之内 一年生二年生三年生 算術
134 明治二十七年度 収支予算 京都市盲唯院
135 明治二十七年度 経費予算差引簿 京都市盲唯院
136 明治二十七年 学事年報 京都市盲唯院
137 明治二十七年及廿八年廿九年 日注簿 京都市盲唯院
138 明治二十七年三月九日 大婚二十五年御祝典一件書類 京都市盲唯院
139 明治二十七年 嚙生尋常科定期試験成績品 三年生 作文・作法・筆談 七綴之内
140 明治二十七年 同上申書 京都市盲唯院
141 明治二十七年調 京都市盲唯院沿革略
141A 明治二十七年 諸往復綴込 京都市盲唯院
141B 明治二十七年三月 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
12 自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院

明治28年 合計 12冊
142 明治二十八年三月 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
143 明治二十八年 寄附金入金簿 第貳号 京都市盲唯院
144 明治二十八年 盲唯教育ニ関スル小雑誌・教育書その他
145 明治二十八年 諸往復 京都市盲唯院
146 明治二十八年 同上申書 京都市盲唯院
147 明治二十八年度 経費予算 盲唯院
148 明治二十八年収 経費予算差引簿 京都市盲唯院
★149 明治二十八年 新築割出草按 京都市盲唯院
150 明治二十八年 学事年報
151 明治二十八年三月 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
12 自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院

明治29年 合計 12冊
152 従明治廿九年一月卅廿七年三月マテ 在学証書 京都市盲唯院
153 明治二十九年 諸往復 京都市盲唯院
154 明治二十九年 学事年報 京都市盲唯院
155 明治二十九年三月 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
156 明治廿九年七月 櫻村男爵奨学金簿 京都市盲唯院
157 明治廿九年十二月 盲唯失音原因取調書 盲唯院
158 明治二十九年度 経費予算 京都市盲唯院
159 明治二十九年 本院ニ関スル故人履歴書
160 明治二十九年 同上申書 京都市盲唯院
160A 明治廿九年四月 試験書類 式綴之内 京都市盲唯院
12 自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院

明治30年 合計 10冊
161 明治三十年五月調 職員録 京都市盲唯院
163 明治三十年度 歳入出予算並明細書 京都市盲唯院
164 明治三十年 学事年報 京都市盲唯院
165 明治三十年一月 諸往復 盲唯院
166 明治三十年四月 試験書類 式綴ノ内 京都市盲唯院
166A 明治三十年一月 同上申 京都市盲唯院
166B 明治三十年四月 試験書類 式綴ノ内 京都市盲唯院
12 自明治十一年至明治三十年 半途退学生名簿 京都市立盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
162 明治三十年一月ヨリ明治三十三年ニ至ル 日注簿 盲唯院

明治31年 合計 15冊
167 明治三十一年六月 宿直日記 盲唯院
168 明治参拾老年度 京都市立盲唯院教場新築及改築並 移転修繕工事設計書 京都市参事会
169 明治三十一年十一月 ベル氏来院記 京都市盲唯院
170 明治三十一年 盲尋常科大試験並学年試験問題
171 明治三十一年 寄付名簿
172 明治三十一年度 経費予算差引簿 京都市盲唯院
173 明治三十一年一月 諸往復 盲唯院
174 明治二十一年六月 本院関係者其他氏名簿 京都市盲唯院
175 明治三十一年六月 学事年報 京都市盲唯院
176 明治三十一年十月廿五日 皇太后陛下へ献上扣 京都市盲唯院
177 明治三十一年 盲唯教育実見綴
177A 明治三十一年四月 試験書類 式綴ノ内 京都市盲唯院
177B 明治三十一年一月 同上申 盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
162 明治三十年一月ヨリ明治三十三年ニ至ル 日注簿 盲唯院

明治32年 合計 12冊
178 明治三十二年 盲唯教育ニ関スル雑誌類
179 明治三十二年 学事年報 京都市盲唯院
180 明治三十二年 本院職員履歴書 京都市盲唯院
181 明治三十二年 同上申 盲唯院
182 明治三十二年四月 試験書類 参綴ノ内 京都市盲唯院
183 明治三十二年四月 盲尋常科試験成績品 四綴ノ内 盲唯院
184 明治三十二年 諸往復 京都市盲唯院
185 明治三十二年度 経費予算差引簿 京都市盲唯院
186 明治卅二年ヨリ 式典並臨時件綴 京都市盲唯院
186A 明治二十二年四月 試験書類 参綴ノ内 京都市盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
162 明治三十年一月ヨリ明治三十三年ニ至ル 日注簿 盲唯院

明治33年 合計 11冊
187 明治三十三年 同上申 盲唯院
188 明治三十三年四月 試験書類 参綴ノ内 諸務ニ関スル部 京都市盲唯院
189 明治三十三年 雑誌類
190 明治三十三年度 学事年報 京都市盲唯院
191 明治三十三年度 経費予算差引簿 京都市盲唯院
192 明治三十三年四月 宿直日記 盲唯院
193 明治三十三年 諸往復 盲唯院
194 明治三十三年一月 財産原簿 京都市盲唯院
194A 明治三十三年四月 試験書類 参綴ノ内 京都市盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
162 明治三十年一月ヨリ明治三十三年ニ至ル 日注簿 盲唯院

明治34年 合計 11冊
195 明治三十四年四月 試験書類 式綴ノ内 京都市盲唯院
196 明治三十四年 雑収入領収証綴り 盲唯院
197 明治三十四年 同上申 盲唯院
199 明治三十四年一月 宿直日記 盲唯院
200 明治三十四年度以降 学事年報、公学費及資産表 市立盲唯院
201 明治三十四年度 経費予算差引簿 京都市立盲唯院
202 明治三十四年 参観命簿 盲唯院
203 明治三十四年四月ヨリ 宿直日記 盲唯院
203 明治三十四年 資金綴
198 自明治三十四年一月至明治三十八年十二月 日注簿 盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院

明治35年 合計10冊
204 明治三十五年四月 当直日記 盲唯院
205 明治三十五年 諸往復 盲唯院
206 明治三十五年 同上申 盲唯院
207 明治三十五年四月 学年末書類 盲唯院
208 明治三十五年ヨリ 収入金簿 市立盲唯院
209 明治三十五年度 経費予算差引簿 京都市立盲唯院
210 明治三十五年 寄付金申込綴 京都市盲唯院
210A 明治三十五年 学籍イロハ別名簿 盲唯院
198 自明治三十四年一月至明治三十八年十二月 日注簿 盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院

明治36年 合計 15冊
211 明治三十六年一月 宿直簿 盲唯院
212 明治三十六年四月 学年末書類 盲唯院
213 明治三十六年 京都市盲唯院概況
214 明治三十六年 同上申 盲唯院
215 明治三十六年度 経常費予算差引簿 市立盲唯院
216 明治三十六年 諸往復 盲唯院
217 明治三十六年九月 盲生教授用点字印刷器械寄附簿 市立盲唯院
218 明治三十六年九月 矢野奨学金簿 京都市立盲唯院
218A 明治三十六年七月 第一学期成績表 市立盲唯院
218B 明治三十六年十二月 第二学期成績表 市立盲唯院
218C 明治三十六年 職員生徒往復 盲唯院
198 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
53 自明治三十四年一月至明治三十八年十二月 日注簿 盲唯院
227B 内明治三十七年四月至明治三十九年三月 入学願 在学証 入舍願 転住届 市立盲唯院
大阪ニ於ケル第五回国内勸業博覧会出品ニ係ル書類

明治37年 合計 13冊
219 明治三十七年改写 賞状写 盲唯院
220 明治三十七年 同上申 盲唯院
221 明治三十七年四月 学年末書類 盲唯院
222 明治三十七年一月 宿直簿 盲唯院
223 明治三十七年度 経常費予算差引簿 市立盲唯院
224 明治三十七年二月 学資補給基金簿 京都市立盲唯院
225 明治三十七年 職員生徒往復 盲唯院
226 明治三十七年 遅附録 京都市盲唯院
227 明治三十七年 盲生篤交会第二回報原稿
227A 明治三十七年 諸往復 盲唯院
198 自明治三十四年一月至明治三十八年十二月 日注簿 盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
227B 内明治三十七年四月至明治三十九年三月 入学願 在学証 入舍願 転住届 市立盲唯院

明治38年 合計 12冊
228 明治三十八年四月 進級生臺帳 盲唯院
229 明治三十八年度 経常費予算差引簿 市立盲唯院
230 明治三十八年 同上申 盲唯院
231 明治三十八年度 経費予算差引簿 市立盲唯院
232 明治三十八年 宿直簿 盲唯院
233 明治三十八年四月 廻覧簿 青唯院
234 明治三十八年五月起 金費受払簿
235 明治三十八年五月起 救助金請払簿
235 明治三十八年四月 学年末書類 盲唯院
198 自明治三十四年一月至明治三十八年十二月 日注簿 盲唯院
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
227B 内明治三十七年四月至明治三十九年三月 入学願 在学証 入舍願 転住届 市立盲唯院

明治39年 合計 11冊
236 明治三十九年 職員履歴書 市立盲唯院
237 明治三十九年 同上申 盲唯院
238 明治三十九年 諸往復 盲唯院
239 明治三十九年四月 学年末書類 盲唯院
240 明治三十九年 寄附金関係綴
241 明治三十九年 組織変更案其他
241A 明治三十九年 職員生徒往復 盲唯院
241B 明治三十九年一月同四十年 記録簿
53 従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲唯院
227B 内明治三十七年四月至明治三十九年三月 入学願 在学証 入舍願 転住届 市立盲唯院
明治三十九年度 経費予算差引簿 市立盲唯院

表1-3 京都府立盲学校資料室所蔵資料
京盲文書全リスト

明治40年 合計 10冊	
242	明治四十年一月一日起 宿直簿 盲啞院
243	明治四十年 見積り書 請求書類 市立盲啞院
244	明治四十年四月 学年報調査資料
245	明治四十年 寄附金関係綴 市啞院
246	明治四十年 諸往復 盲啞院
247	明治四十年度 消耗品郵便切手額共受払簿 市立盲啞院
248	明治四十年 向上申 盲啞院
249	明治四十年 京都市盲啞教育革新ノ議
250	明治四十年四月 学期末書類 盲啞院
53	従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号 盲啞院
明治41年 合計 13冊	
251	明治四十一年 雑収入調停額報告書類 市立盲啞院
252	明治四十一年一月一日起 宿直簿 盲啞院
253	明治四十一年 経費予算差引簿 市立盲啞院
254	明治四十一年 諸往復 盲啞院
255	明治四十一年三月 学年末書類 市立盲啞院
256	明治四十一年度 歳入出予算案 乙号 市立盲啞院
258	明治四十一年 向上申 盲啞院
259	明治四十一年四月 第二回全国盲啞学校教員会会計簿 市立盲啞院
260	明治四十一年度 盲啞院歳入出総計予算
53	従明治十八年四月至同四十一年三月 奉名簿第貳号
257	自明治四十一年至四十二年 記録簿 盲啞院
261	自明治四十一年度至大正六年三月 奉名簿 参 市立盲啞院
261A	明治四拾老年から大正拾一年迄 盲部失官表

数字は表紙に貼られたシールの番号である注10)

明治42年 合計 7冊	
262	明治四十二年 学年末書類
263	明治四拾貳年四月起 教案 佐藤
264	明治四十二年一月一日起 宿直簿 盲啞院
265	明治四十二年度 盲啞院予算差引簿 市立盲啞院
257	自明治四十一年至四十二年 記録簿 盲啞院
261	自明治四十一年度至大正六年三月 奉名簿 参 市立盲啞院
261A	明治四拾老年から大正拾一年迄 盲部失官表
明治43年 合計 10冊	
266	明治四十三年分 学年末書類 市立盲啞院
267	明治四十三年九月二十八日 皇太子殿下行啓記録 京都市立盲啞院
268	明治四十三年六月 文書受付簿送達共 市立盲啞院
269	明治四十三年八月一日 宿直簿 盲啞院
270	明治四十三年度 物品受払簿 備品之部 市立盲啞院
271	明治四十三年 向上申 盲啞院
272	明治四十三年一月一日 宿直簿 盲啞院
261	自明治四十一年度至大正六年三月 奉名簿 参 市立盲啞院
261A	明治四拾老年から大正拾一年迄 盲部失官表
272A	明治四十三年一月ヨリ大正四年九月ニイタル 参観名簿 市立盲啞院

明治44年 合計 10冊	
273	明治四十四年分 学年末書類 市立盲啞院
274	明治四拾四年度七月廿一日以降 宿直日誌
275	明治四十四年度 見積り書類 盲啞院
276	明治四十四年 京都市立盲啞院日誌
277	明治四拾四年 諸往復 盲啞院
278	明治四十四年 向上申 盲啞院
279	明治四十四年度 学年末書類 京都市立盲啞院
261	自明治四十一年度至大正六年三月 奉名簿 参 市立盲啞院
261A	明治四拾老年から大正拾一年迄 盲部失官表
272A	明治四十三年一月ヨリ大正四年九月ニイタル 参観名簿 市立盲啞院
明治45年 合計 13冊	
280	明治四十五年三月 京都府管内盲啞者取調書 (盲啞生分離ニ関シテ) 盲啞院
281	明治四十五年四月 朝会日誌 盲啞院
282	明治四十五年度 消耗品類要求簿 市立盲啞院
283	明治四十五年 諸往復 盲啞院
284	明治四十五年 見積り書類 盲啞院
285	明治四十五年度 備品要求簿 市立盲啞院
286	明治四十五年度 実習材料要求簿 盲啞院
287	明治四十五年 向上申 盲啞院
288	明治四十五年度大正元年度 物品購入修繕並検収簿 市立盲啞院
261	自明治四十一年度至大正六年三月 奉名簿 参 市立盲啞院
261A	明治四拾老年から大正拾一年迄 盲部失官表
272A	明治四十三年一月ヨリ大正四年九月ニイタル 参観名簿 市立盲啞院
	明治四十五年参月 当直日誌

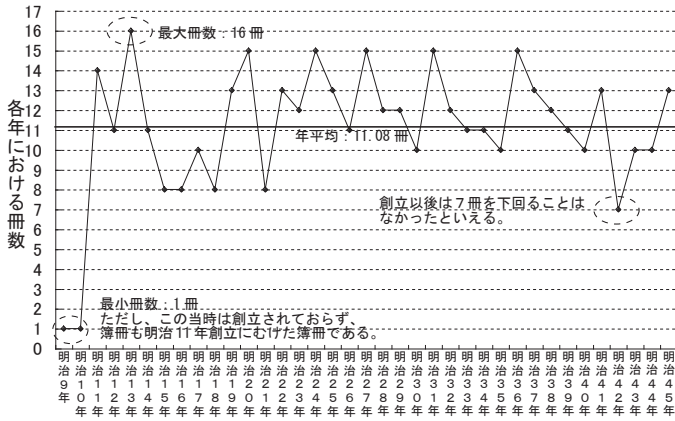


図1 各年の京盲文書数

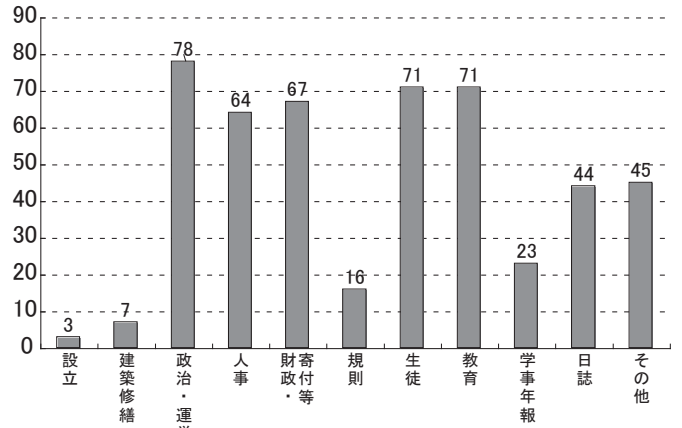


図2 内容別文書数

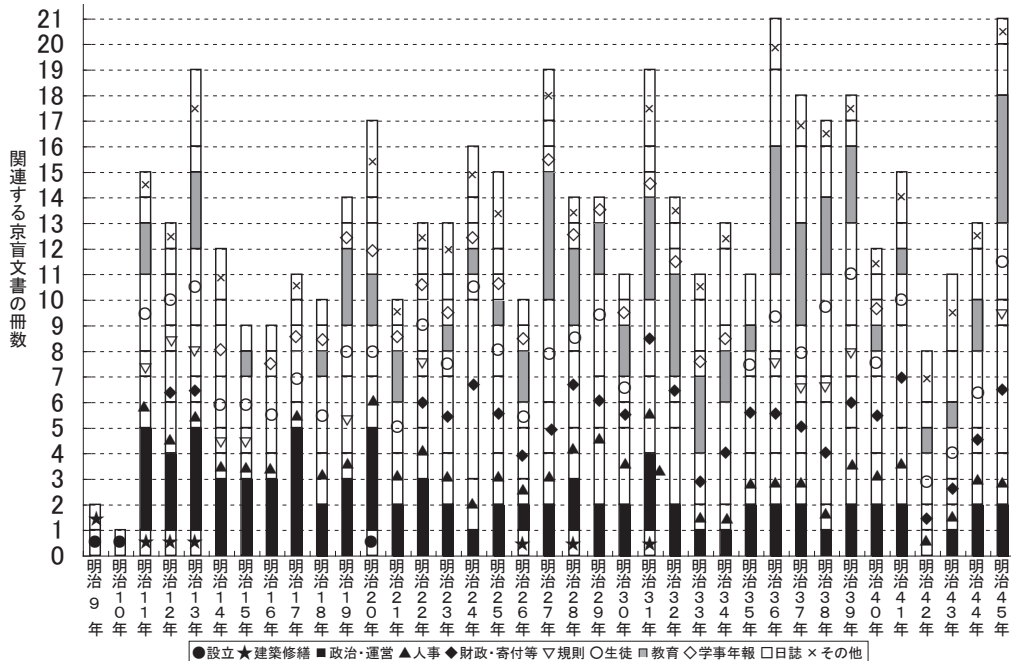


図3 各年の京盲文書分類表

ケース、「財産原簿」のように京都盲啞院が所有する対象について建築の名称が記述されている箇所もみられた。

4-5 京盲文書の年次推移について

そこで、それぞれの文書を年ごとに分類したところ図3のようになった。これをみると、「政治・運営」「人事」「生徒」「教育」「日誌」については、ほぼ年ごとに文書が現存している。また、「建築修繕」については、毎年まとめられているわけではないことがわかる。「学事年報」は明治三十五年までは必ず毎年編纂されていたが、これ以降は編纂がなくなってしまっている。図1によれば、傾向としては、16冊のピークを迎え、減少したのちに増加していく状況がみられた。この間をみると、皇族や著名人の訪問に関する簿冊、「教育」における定期試験の簿冊、明治二十年代には財政・寄付関連の文書が増減している。財政・寄付関連については、既往研究^{注11)}によれば、盲啞院では逼迫な財政を強いられた時期と合致している。

5、明治期の盲啞教育の建築・空間について

ここでは、待賢小学校瘡啞教場から第四期盲啞院の計画図まで時系列に沿って分析を行う。待賢小学校瘡啞教場は、盲啞院と別の機関であるために京都市学校歴史資料館の資料と学校史を中心に分析した。仮盲啞院からは京盲資料を中心に分析を行った。

京盲文書の題について言及するとき、頭にある括弧で囲んだ数字は表1-1、1-2、1-3と合致する京盲文書の整理番号である。

5-1-1 待賢小学校瘡啞教場（明治八年頃～十一年）

待賢小学校は明治二年に開校し、平成九年に閉校している小学校である。京都盲啞院初代院長の古河太四郎は待賢小学校の訓導を勤め、京都盲啞院の前身である瘡啞教場を指導していた。しかし、京盲文書に関連資料は写真（写真2）しかみられなかった^{注12)}。これは、待賢小学校の玄関前であり、写真の右にある看板から待賢尋常小学校となった明治二十年以降に撮影されたと考えられる。また、待賢小学校の年史が公刊されており、戦後に刊行されたものは戦前に刊行されている『京都小学三十年史』『沿革史』『京都小学五十年誌』に典拠しているため、まず、戦前の三冊について紹介したい。

5-1-2 待賢小学校の学校史について

『京都小学三十年史』（明治三十四年 京都市小学校創立三十年記念会編）については、京都における番組小学校に関する全体の記事三編について湯本文彦^{注13)}が編纂している。一編には、日表、学区、校則、教科書、試験方法、教員・職員、経費など規則が掲載されている。二編には各小学校記事があり、三編には京都市小学校創立三十年記念会記事が掲載されている。

成立について、明治三十一年から小学校創立三十年に開設された「京都市小学校創立三十年記念会」が、「小学校沿革史編纂」を編集することとなったと解説されている^{注14)}。なお、執筆期間として序文・跋文と凡例に記載された年代から明治三十二年春から明治三十四年四月の約二年間に執筆されたであろうとしている^{注15)}。

『沿革史』（明治三十九年 待賢小学校）は当時の校長木村繁三郎が編纂したもので、戦後に編纂された年史にも紹介されているものである。表紙のみの写真が京都市学校歴史博物館に蔵されている。今回の調査にあたり重要な資料であるが、現在行方不明である。そこで、『京都府盲聾教育百年史』で調査された際の記述から引用する。

『京都小学五十年誌』（大正七年 京都市）については、京都市内



写真2 待賢尋常小学校写真

の小学校に関する統計、各校の歴史、教育に関する論文が京都市によって編纂されたものである。「緒言」によれば、『京都小学三十年史』を範としつつ、「各小学校の調査報告を参考し、尚疑はしき著宿先輩に糺して、編纂せし者なり」とあるように、追加調査を行っているものと考えられる。各学校の記事については、「各校の任意の記述なり」とし、形式に拘っていないが、二頁に一枚ずつ紹介される体裁となっている。執筆期間については、「大正七年六月以降に京都市学務課において材料を蒐集し」とあり、発行が大正七年十二月であるので、この半年間に執筆されたと考えられる。

5-1-3 待賢小学校に関する図面について

待賢小学校に関する図面については二点確認できる。一点は、京都府立総合資料館蔵『京都学区絵図』のうち「上京区第十五学区之図」である（図4）。これは「明治三十一年六月十五日 学務委員木村孫兵衛図之 保勝委員椎井小三郎■之」と記載されており、待賢小学校敷地の形態が認められる。

もう一点は、起こし絵図である^{注16)}。これは二枚の板に起こし絵が挟まれており、絵図は板に糊付けされている。蓋には右から「戸長 天野正兵衛調之 明治十九年第一月二十七日 京都府上京区第拾九番区 供立小学待賢校 地図百分一 作人 大工職 宮崎利右衛門 大工職 天野捨治郎」と記載されている。また起こし絵が貼り付けられている板の裏側にも同様に書かれている。起こし絵図には端に「京都府下上京区第十九番学区待賢校建築之略図」と墨書されている。これについて、百分の一の表記に従って清書を行った。図面をみると、「二階建教場」「教場」「土間・教場」が三箇所、「裁縫場」が一ヶ所、「宿舍」が一ヶ所の合計五ヶ所の建築を確認することができる。「土間・教場」「二階建教場」は平面図や立面図から、二階建と想定されるが、二階の図面は付されていなかった。また、井戸・便所が記入されている。

実測すると、起こし絵の敷地面積は386.59坪と算出された^{注17)}。また、起こし絵図を直接計測し、延床面積を算出すると「二階建教場」は49.3坪^{注18)}、「教場」は55.05坪、「土間・教場」は127.16坪^{注19)}であり、「裁縫場」は42坪^{注20)}、「宿舍」は8.2坪であった。裁縫場と宿舍の間に門が設けられているが、これは方角と「上京区第十五学区之図」（図4）から大黒町に面する門と考えられる。起こし絵の中心にある建物の正面には、尖塔のついた洋館のファサードを確認できる。写真2と比較すると、一階部分と異なっているため、尋常

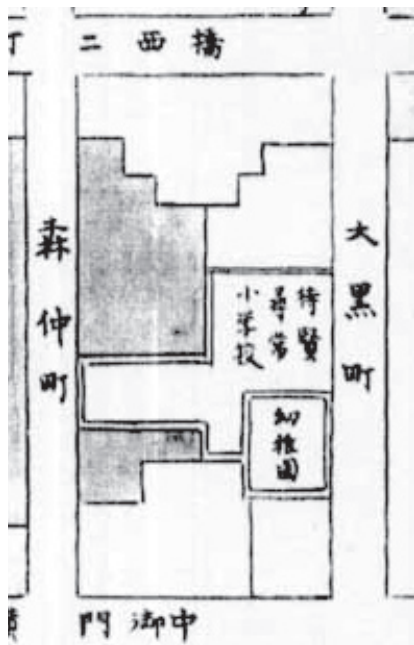


図4 「上京区第十五学区之図」(部分)

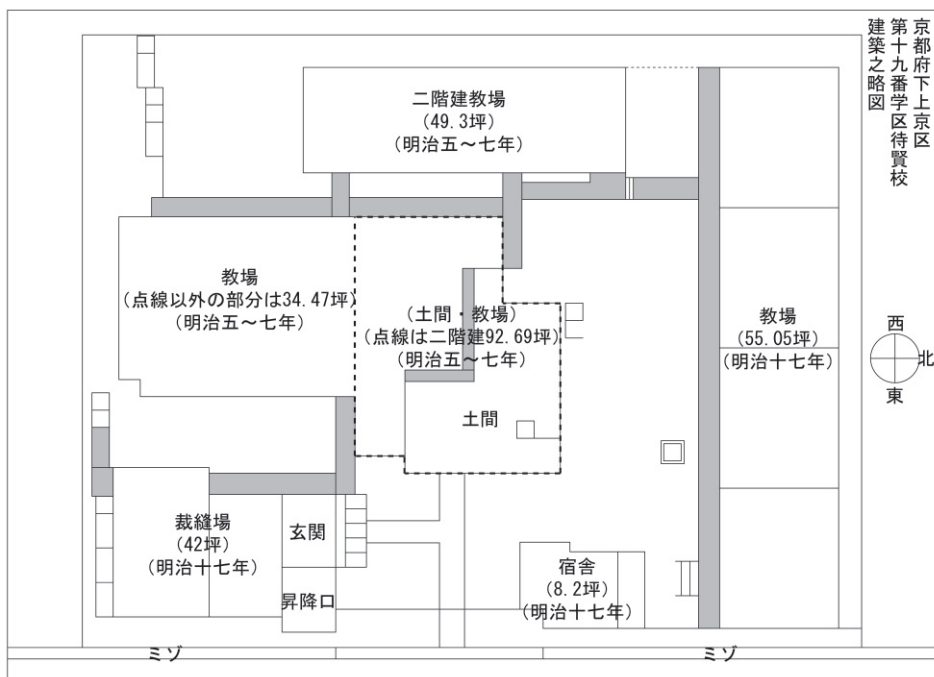


図5 「京都府下上京区第十九番学区待賢校建築之略図」(起こし絵図、括弧は筆者の注釈である)



写真3 「京都府下上京区第十九番学区待賢校建築之略図」



写真4 「土間・教場」の正面部分

表2 待賢小学校の建築と盲啞教育に関する年表

年代	校名の 変遷	『京都小学三十年史』 (明治三十四年)	『沿革史』 (明治三十九年)	『京都小学五十年誌』 (大正七年)
明治2年	上京第十七番組小学校	大黒町浅沼某ノ邸地ヲ買入レ校舍ヲ新建セリ敷地表横六間四歩奥行十七間七歩		明治二年猪熊通權木町北、大黒町阿曾沼某邸宅、平家建二階建総坪数、六十二坪ヲ購入シ、之ヲ校舍ニ充テ
明治3年から明治4年までは記述がみられなかった。				
明治5年			五年には三間に六間、十八坪の事務室を増築	明治五年二月二十四八坪ノ二階建教室ヲ増築シ、上京第十九小学校ト称セリ。
明治6年	上京第十九区小学校			明治六年當時區長タリシ熊谷傳三(マツ)氏、吉河木四郎氏ト謀リ組内ノ盲啞院児ヲ集メ、特殊ノ教育ヲ施セリ。
明治7年			七年七月には二間に四間、八坪の玄関一棟を造営、旧校舍の二階の改築、さらに三間に八間、四十八坪の二階建教室一棟の増築	
明治8年	待賢小学校	明治八年区長熊谷傳藏教員古川太四郎ト謀リ組内盲啞生ヲ入学セシメ種々工夫ヲ凝ラシ之ヲ教育セリ		
明治9年から明治14年までは記述がみられなかった。				
明治15年	待賢小学校			十五年九月裁縫科ヲ設ケ、翌年本校附属裁縫専修科ヲ設立シテ、女子ノ教育ニ盡セリ。
明治16年		十六年之(裁縫科)ヲ開キ		
明治17年		十七年廿五年ニ敷地ヲ増加シ漸次教場校舍等ヲ増築シ建坪三百六十余ニ及ヒタリ		十七年教室其他二百七坪ヲ増設シ
明治18年から明治19年までは記述がみられなかった。				

小学校となる明治二十年以後に改築が施されていると考えられる^{注21)}。尖塔については縦336×横336×高150(mm)の長方体をした露盤^{注22)}が現存している。これは尖塔に設置されたと学校に伝わっており、起こし絵図を測定すると露盤であると考えられる。

5-1-4 図面と他資料の比較について

啞啞教場が明治八年頃に設置されたのは『百年史』での分析に同意するものであるが、この状況を考察するために開校する明治二年から起こし絵図の明治十九年まで確認したい。『京都小学三十年史』『京都小学五十年誌』『沿革史』と図面が作成されたと考えられる明治十九年と比較するために表を作成した(表2)。記載の年代が異なっているが、それも含め起こし絵から分析を行いたい。

5-1-5 明治二年の状況について

『京都小学三十年史』には「大黒町浅沼某ノ邸地ヲ買入レ校舍ヲ新

建セリ敷地表横六間四歩奥行十七間七歩」とする。この敷地を試算すると113.41坪となり、『京都小学五十年誌』では明治二年に62坪の平家建二階建を購入し、校舎に充てたとすることと矛盾しない敷地面積である。しかし、起こし絵では62坪に該当する平家建を見出すことができないため、明治十九年までには失われたと考えられる。

5-1-6 明治五年の状況について

『京都小学五十年誌』には「四十八坪ノ二階建教室ヲ増築」とある箇所は、次項で解説する。『沿革史』には「三間に六間、十八坪の事務室を増築」とあるが、該当する建築を起こし絵図から見出すことができず、明治十九年までに失われたと考えられる。

5-1-7 明治七年の状況について

『沿革史』から四箇所の記述が認められ、項目ごとに検討したい。「二間に四間、八坪の玄関一棟を造営」は起こし絵と合致する部分が見られなかったので失われたと思われる。

「三間に八間、四十八坪の二階建教室一棟の増築」は細長い建築であることと、坪数からみて「二階建教場」を指していると考えてよいと思われる。『京都小学五十年誌』では明治五年に「四十八坪ノ二階建教室ヲ増築」とあり、坪数・階数が合致しているのと、起こし絵では他に建築が見当たらず、同じ建築を指す可能性が考えられる。

「旧校舎の二階の改築」は起こし絵でもうひとつの二階のある「教場・土間」を指すと考えられる。「旧校舎」と表記されており、このときは校舎ではなく、管理部分ではないかと考えられる。5-1-3で紹介した露盤には「十九区」と彫られてあり、「上京第十九区小学校」と称していた時代に建築されたと考えられる。「旧校舎の二階の改築」の記述を合わせると、明治五年五月から七年の間に建てられ、待賢小学校となる明治八年六月以降も使用されたと思われる。

5-1-8 明治十五年、十七年以降の状況について

『京都小学三十年史』『京都小学五十年誌』では「裁縫科」に関する記述がみられ、起こし絵図には「裁縫科」が表記されているので、この位置にあったと考えられる。

『待賢 輝ける128年のあゆみ』^{注23)}の年表に「明治十七年 木造家屋約五十三坪を買収し教室六十四坪増築」とある。これについては、起こし絵の「教場」は55.05坪であるが、隣接する廊下を含めると64.81坪と近似しており、これは「教場」が木造家屋であり、廊下を増築したものと考えられる。

『京都小学五十年誌』で「十七年教室其他二百七坪ヲ増設シ」とあり、117坪の増築には教室だけでなく教室以外も設置したものと思われるが、起こし絵図によれば「宿舎」ではないかと考えられる。「裁縫場」は建築年代が不明であり、「教場」「裁縫場」「宿舎」3棟の合計を廊下も含めて試算すると115.01坪となり、117坪と近似している。したがって、この3棟が明治十七年以降に建設されたと考えられる。

『京都小学三十年史』では「十七年廿五年ニ敷地ヲ増加シ漸次教場校舎等ヲ増築シ建坪三百六十余ニ及ヒタリ」とあり、起こし絵図では総延床面積が281.71坪であるので、明治二十五年の360坪までに拡張される前の状況を示す起こし絵図だと考えられる。

5-1-9 待賢小学校瘡啞教場の位置について

この教場は、明治九年は訓導一名、生徒数が啞生二名と少人数であり^{注24)}、建築の一部で運営されたと考えられる。そこで、これまで述べたことから明治八年頃から十一年までの瘡啞教場の位置につ

て考察する。「教場」「裁縫場」「宿舎」は明治十七年以降の建築であると考えられるので、除外され、明治五年から七年の間に建てられた「土間・教場」「二階建教場」が残る。「土間・教場」は明治五年に「旧校舎」とあるので、教場ではない。「土間・教場」は起こし絵では一階に「教場」と表記されているが、二人が学習する空間としては規模が広すぎる。したがって、瘡啞教場は「二階建教場」の一部を活用して運営されたと考えられる。

5-2 仮盲啞院（明治十一年五月二十四日～十二年九月十二日）

ここからは京盲文書の分析になる。まず、既報で伝えたように、仮盲啞院が東洞院御池通上ルに開校するが、図面が一枚、(4)『明治十一年諸問』のなかに挿入されている。障子の枚数が図面に記載されており、これを基に寸法を算出すると、二百分の一で作成されたと考えられる。方位を確認すると西を通りに接しており、『百年史』の記述と合致する。図面の作成者については判然としないが、この図面の前後に京都府学務課と所有者の下村正太郎による明治十一年四月の建築物を仮盲啞院に充てることに関する問い合わせと承諾に関する往復文書が挟まれているので、図面もその附図であると考えられる。また、(15)『自明治十一年到明治十四年 検査用書類綴込盲啞院』という、試験時の対応について記述された書類の明治十一年の項にも、仮盲啞院の図面があり、啞生と盲生を部屋のなかでどのように区分するかが記入されている。これは(4)『明治十一年諸問』に含まれた間取りと異なることが注目され、状況に応じて変更していたものと考えられる。この図面の前頁に明治十一年十二月十九日付の書類が含まれ、この時期だと想定される。

5-3 第一期盲啞院（明治十二年九月二十二日～十三年一月）

既報では、恭明宮から移築したことを明らかにしたが、これは、(1)『明治九年 恭明宮一件 京都府』にある恭明宮を盲啞院に移築することに関する文書と図面から分析を行った^{注25)}。移築対象となる建築物に畳数が記入され、また方位も記入されている。畳数から寸法を算出すると、二百分の一となった。方位については、『恭明宮工事録』の全体図と比較すると一致している^{注26)}。図面に信をおいてよいと考えられる。しかし作成者については見出すことができなかった。

(11)『明治十一年 建築及修繕一件』は、盲啞院の古河太四郎と遠山憲美が京都府知事の榎村正直や学務課と盲啞院の敷地選定から建築までの往復書簡を綴じたものであり、文書の日付から、明治十二年九月から明治十四年までの校舎に関する史料類と考えられる。この文書には計画案、平面図、立面図、敷地図が多くあるが、いずれも作図者の記入はされていない。しかし、説明文の筆跡に古河太四郎によるものが認められ、古河が関係していたと想定される。

(16)『明治十二年 中学内英学寄宿舎並盲啞院新築一件』は恭明宮の引渡文書のほか、移築される建築の配置図、建築図面、正門前の立面図が含まれている。配置図には畳数が記入され、朱で増築する部分が記入されている。これは実現には至らなかった図面であるが、盲啞院敷地の南には、明治五年五月に二十三区と改称された地域の小学校があり、明治二十年に梅屋尋常小学校と改称されている。計画図には、「上京式拾参校」となっているので、明治二十年以前に書かれた図面であると考えられる。作図者は明らかではないが、計画図には京都府知事の榎村正直ら三名の朱印があり、京都府内で回覧されたものと考えられる。また、第一期盲啞院が建築される前の縄張りに関する新聞記事^{注27)}がみられた。

5-4 第二期盲啞院（明治十四年～十九年）

(28)『明治十三年 盲啞院教場建築地買上件』は盲啞院、京都府、所有者である合業会社の文書であり、敷地の購入に関する折衝が行われていたことが伺える。

次に、『旧閑院宮邸地図』と書かれた図面が保管されている。これは、一枚の紙を折り畳んだものであり、寸法は1560×1430mmであった。坪数と畳枚が記入されており、実測したところ百分の一とわかった。方位、道路の名称、敷地が既往研究と合致しているため信を置いてよいと考えられる^{注28)}。他の建築に移築したことを示す紙がはりつけられている箇所がみられ、すべて京都盲啞院に移築されたのではないと考えられる。この平面図は建築における研究では活用されたことはなく、重要な図面だと考えられる。次に外部資料であるが、京都府立総合資料館には『京都盲啞院等平面図』という和紙に墨書された平面・配置図が所蔵されている。『旧閑院宮邸地図』と比較すると、閑院宮邸の移築後の図面であり、各室には畳数が記入されている。また、寄宿舎建設に関する新聞記事^{注29)}がみられた。

5-5 第三期盲啞院（明治十九年～三十一年）

(92)『明治二十二年 所有財産調書類 盲啞院』では、盲啞院の図面は掲載されていないものの目録が書かれており、「工場場建家」「普通科教場建家」「事務所外教場其他建家」など建築の目録が記載されている^{注30)}。(92)『明治二十二年 所有財産調書類 盲啞院』に挿入されている図面は建築物の輪郭が引かれ、閑院宮から移築されたと思われる部分を確認することができ、5-4と連続するものであ

る。これは、南に接する隣地に「上京貳拾参校」の表記があり、明治二十二年以前に作図されたものと考えられるので、簿冊が編まれた年代と異にしている。

(128)『明治二十六年二月 寄宿舎増建一件 盲啞院』は、盲啞院の寄宿舎を増築する際の関係書類であり、平面図が挿入されている。実測したところ、百分の一と二百分の一だと考えられる。

(149)『明治二十八年 新築割出草按 京都市盲啞院』は明治三十一年に第四期盲啞院として改築工事が開始される前の案であり、平面図と簿冊、実施図、予算表、部材表が廃紙に包まれ、紐で縛られている。畳数が記入されている箇所や敷地を実測したところ、二百分の一と百分の一があることがわかった。また、グリッドを引いている図面、鉛筆でガラスを嵌める箇所を指定している図面もみられた。

また、『京都市盲啞院校舎百分之一縮図』、『自明治三十一年六月至同三十二年三月 京都御苑内博覧会場内 京都市盲啞院仮校舎之図』、『京都盲啞院改築校舎百分之一縮図』の掛図がある。1つめは、(128)『明治二十六年二月 寄宿舎増建一件 盲啞院』で建築された寄宿舎が記入されていることから、このとき以降に作図されたものであろうと考えられる。2つめは明治32年に完成する盲啞院のために一時、教員と生徒が引っ越した盲啞院の図面であり、3つめは明治三十一年から明治三十二年に改築された際の図面であり、1つめと3つめに関しては表記通り百分の一であることが確認できた。なお、ここで解説した図面・掛図はいずれも作図者を明らかにできなかったが、棟札^{注31)}によれば、改築工事主任が植村常吉^{注32)}、工事監督が木子智隆であり、この人物に近い関係者の可能性が考えられる。

(194)『明治三十一年三月 財産原簿』は盲啞院の備品を記録したものであり、「本院新築主任並ニ監督ノ写真」が二枚所蔵されていることが明記されている。これは植村と木子を指すと考えられるが、京都府立盲学校資料室のなかで見出すことはできなかった。



図6 京都盲啞院の建築に関連する文書一覧

6 まとめ

- 1、明治期で325点の京盲文書が存在しているが、11種類に分類することができる。平均すると一年あたり11.08冊の簿冊がある。このうち行政機関との往復に関する文書が78点と最多であり、行政側と緊密に連絡を取り合っていた。また、収支、生徒の記録、校則、教育、盲啞院の略歴に関する史料もみられ、幅広く記録が残っている。
- 2、京盲文書のうち、建築のみに特化した文書は7点であった。建築は建築に関する簿冊に往復書簡と平面図・立面図がにまとめられており、盲啞院、行政関係者の建築に対する意識の高さがうかがえる。計画図は第一期盲啞院と第四期盲啞院にみられた。
- 3、待賢小学校の学校史、写真、校区図、露盤と起こし絵図を比較した結果、起こし絵図は明治十九年一月に作成されたことに信をおいてよいと考えられる。
- 4、待賢小学校の「土間・教場」「二階建教場」は明治五年から七年の建築であり、「裁縫場」「教場」「宿舎」は明治十七年に建てられたと考えられる。このうち、京都盲啞院の前身といえる待賢小学校瘡啞教場は、「二階建教場」の一部を活用していたと考えられる。
- 5、待賢小学校瘡啞教場と京都盲啞院の建築・空間に関する資料は図6のように文書13点、図面6点、写真1枚にまとめられる。

謝辞

本研究においては、京都府立盲学校資料室と京都市学校歴史博物館、京都府総合資料館の資料を活用させていただきました。また、京都市学校歴史博物館の竹村佳子学芸員、京都府立盲学校の岸博実教諭から多くの助言をいただきました。ここに深謝いたします。また終始懇切丁寧なご指導・ご教示を賜りました横浜国立大学工学研究の大原一興教授に対し、深く感謝の意を表します。本研究の一部は福武学術文化振興財団研究助成（歴史学）を受けました。

注

- 注1) 京都盲啞院の呼称は時期によって、京都府盲啞院、京都市立盲啞院、京都市盲啞院があり「啞」の表記も「啞」があるが、ここでは京都盲啞院と用語を統一させていただいた。
- 注2) 木下知威、大原一興『京都盲啞院におけるプログラムと空間構成に関する研究』日本建築学会計画系論文集、647号、2010年1月
- 注3) 待賢小学校『沿革史』1906（これは現在行方不明である）
待賢小学校『本校移転改築略史』（明治三十年代の記録であり、除外した）
池田保之助『京都小学三十年史』京都市小学校創立三十年記念会編1902.1
『京都小学五十年誌』京都市、1918
待賢小学校創立百二十周年記念誌編集委・待賢小学校記念誌編集委『待賢校百二十年史』待賢小学校創立百二十周年記念事業実行委1989.11
待賢百周年記念事業委『待賢校百年史』待賢百周年記念事業委1991
京都市立待賢小学校『待賢子ども風土記』京都市立待賢小学校1991
京都市教育委員会編『待賢 輝ける128年のあゆみ』京都市教育委1999
- 注4) 辻ミチ子「小学校の建営」『京都の歴史7』学芸書林 昭和48年p501
辻ミチ子『町組と小学校』角川書店1977年
秋山國三『近世京都町組発達史』法政大学出版局1981年 p388-468
- 注5) 大場修『京都旧番組小学校の校舎プラン：小学校校舎の地方史II』日本建築学会計画系論文集、512号、pp. 245-252, 1998
- 注6) 森章博：明治初期京都に於ける小学校中学校の創設事情に関する歴史的研究、同志社大学人文科学研究紀要、No.6（1963-04-25）pp. 85-121
- 注7) 京都市立盲啞院『京都市立盲啞院一覽』1903年（創立25周年記念）
両校同窓会『日本盲啞教育史』1929
京都府立盲学校『創立七十五周年記念誌』1957
京都府立聾学校『創立九十年誌』1968
盲聾教育開学百周年記念実行委員会『京都府盲聾教育百年史』1978
- 注8) 丸川仁夫編『日本盲啞教育史』京都市立盲・聾啞学校同窓会1930

- 鈴木力二「日本盲教育写真史」あをい会1958
- 中野善達他「わが国特殊教育の成立」東峰書房1968
- 鈴木力二「古河太四郎と京都府盲啞院」（日本盲教育史資料第二集）あをい会1969
- 桜庭修、水野サダ子「京都府盲啞院設立一件」京都府立盲学校資料室1980
- 岡本福丸「近代盲聾教育の成立と発展」NHK出版1997
- 京都府立盲学校資料室『京都府立盲学校所蔵 資料室保存資料目録』2005
- 注9) 京都府による行政に関する文書である。京都府立総合資料館蔵。
- 注10) 桜庭修、他『京都府盲啞院設立一件』京都府立盲学校資料室、1980
上記で京盲文書を編纂する際、簿冊ごとにシールをはりつけてリスト化している。これは、表1-1、1-2、1-3に反映させている。
なお、シールが貼られてない文書については文書名のみ示した。
- 注11) 西田美昭：盲聾教育形成期における就学保障の展開：京都盲啞院の「発展」と「挫折」、社会科学研究、37巻4号、pp. 205-249, 1985。
- 注12) 古河太四郎の遺族から京都府立盲学校に遺品が寄贈されている。これらを調査したが、待賢小学校の建築に関するものは見出せなかった。
- 注13) ゆもと・ふみひこ（1843-1921）明治-大正時代の教育者、郷土史家。京都通史『平安通志』、『京華要誌』などを編纂した。
- 注14) 『京都小学三十年史』（第一書房、昭和五十六年復刻）の仲新による解題。
- 注15) 前掲
- 注16) 2009年、待賢小学校の後身である二条城北小学校にて発見された。
- 注17) 起こし絵には建築の周囲に塀があり、囲む線を実測して算出した。
- 注18) 二階の図面が付されていないが、立面図をみると二階は一階より狭いので、そこから面積を算出した。
- 注19) 注18と同様の方法で面積を算出した。
- 注20) 裁縫場は昇降口が玄関の横に表記されているが、立面図をみると一階で止まっている。また、昇降口は玄関の横にある。したがって、二階への昇降口ではなく、履物をぬぐ昇降口ではないかと考えられる。
- 注21) 『京都小学五十年誌』によれば「明治二十五ニ至リニ、又校舎改築ノ議ヲ決シ、本来ノ建物ヲ撤去シテ、講堂、教室及生徒溜所等総坪数百三十二坪七合ヲ新築セリ。」とあるように、取り壊されたと思われるので、写真は明治二十五年以降と推測される。
- 注22) 現在、二条北小学校に収蔵されている。この尖塔は京都市教育委員会編『待賢 輝ける128年のあゆみ』（京都市教育委員会）に掲載されているイラストと共通している。
- 注23) 待賢小学校のホームページで紹介されている年譜にも記載があるが、これは上記、注22の学校史からの引用と考えられる。
- 注24) 『京都府盲聾教育百年史』P17 この時点で、最初に古河太四郎から指導を受ける盲人である半井緑はまだ入学していなかったと考えられる。
- 注25) この文書には虫食いがみられ、修補として裏打がされている。
- 注26) 宮内庁書陵部蔵
- 注27) 「〇いよいよ盲啞院の本校が上京区二十一組釜座通り丸太町上る所へ今度新たに建築の縄張が出来ました」『西京新聞』明治12年5月10日
- 注28) 森蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』養徳社、1962
吉村龍二、閑院宮邸跡庭園修復整備事業について（平成18年度日本庭園学会関西大会研究発表要旨）、日本庭園学会誌、pp 99-109, 2007.10
- 注29) 「他府県人の入校願出る者続々たれば今度同院の北手に宏大なる校舎を建築し他府県人の寄宿所に宛てらるる由にて本月中には落成の目途なりと云ふ」『京都新報』明治14年6月11日
- 注30) この資料には『所有建家敷地同書目録 盲啞院之部』が記載されている。障子など建具は、分量の関係で省略した。（「/」は改行を意味する）
一 建家拾棟瓦葺 此坪数参百四拾老坪八勺 但敷地官用地明治十三年五月ヨリ向フ廿五年間借用/内訳 工場場建家 36.56坪 彫鐫科教場 一ヶ所、図画教場 一ヶ所、望火櫓 一ヶ所/普通科教場建家 65.19坪/畳13帖半、伝廊下建家 2.32坪/事務所外教場其他建家/北玄関 一ヶ所、刺繡科教場 一ヶ所、按鍼学教場 一ヶ所、便所 一ヶ所、袖垣 一ヶ所、事務所 一ヶ所、女生徒寄宿寮 一ヶ所 畳16帖半/北食堂建家 13.2坪/土蔵 8.62坪/賓客室外一ヶ所 100.43坪/賓客室 畳36帖半、便所、男生徒入室室 畳47帖半、便所、建継玄関 4.42坪/土蔵 10.36坪/食堂外建家 23.36坪/湯殿 1.28坪/小使宿直所 3.74坪/門
- 注31) 棟札には以下のように書かれている。（「/」は改行を意味する）
市長 内貴甚三郎/院長 鳥居嘉三郎/改築工事主任 植村常吉/工事監督 木子智隆/工事請負人 鈴鹿弥惣吉/代理人 大槻助治郎/工事肝煎 小倉勝次郎/本建築物明治三十一年十月移転修繕シタルモノナリ/
明治三十二年十月
- 注32) 『明治大正建築写真聚覧』によれば、明治30年に京都株式取引所を設計した京都府技手である。

(2009年10月10日原稿受理、2010年2月2日採用決定)